

ローマ人への手紙

— 信仰による世界の相続人として —

世界の相続人となるという約束が、
アブラハムに、あるいは彼の子孫に与えられたのは、
律法によってではなく、
信仰による義によってであったからです。

ローマ人への手紙 4章 13節



目次

手引の使い方	v
まえがき	2
著者パウロ	2
「ローマ人への手紙」について	2
神のご計画	4
1 課 はじめに 1:1-17	8
A あいさつ 1:1-7	8
B ローマ訪問を願う 1:8-17	10
2 課 すべての人は罪人 1:18-3:20	12
A 人類の罪 1:18-32	12
B えこひいきのない神 2:1-16	14
C ユダヤ人の罪 2:17-3:8	16
D ユダヤ人も異邦人も神のさばきに服する 3:9-20	17
3 課 信仰による義 3:21-4:25	19
A 神の義が示される 3:21-26	19
B 信仰によって世界の相続人となる (1) 3:27-4:12	21
C 信仰によって世界の相続人となる (2) 4:13-25	23
4 課 キリストとの新しい歩み 5:1-8:39	25
A 喜びをもって歩む 5:1-11	25
B 永遠のいのちの希望をもって歩む 5:12-21	28
C 義の奴隷として歩む 6:1-23	30
D 律法の役割を理解して歩む 7:1-25	33
E 聖霊（「御霊」）によって歩む 8:1-13	36
F 世界の相続人として歩む 8:14-25	38
G 聖霊にとりなされて歩む 8:26-30	41
H 神の愛を確信して歩む 8:31-39	43

表紙イメージ：

ヴァランタン・ドゥ・ブローニュ（もしくはニコラ・トゥルニエ）『執筆中の使徒パウロ』

1618-20年頃 油彩 ヒューストン美術館（アメリカ）

5 課 ユダヤ人の救い 9:1-11:36	45
A あわれみゆえの選び 9:1-29	45
B ユダヤ人の不信仰 9:30-10:13	48
C ユダヤ人の残りの者 10:14-11:10	50
D ユダヤ人がつまずいた意味 11:11-36	52
6 課 新しい歩みの実際 12:1-15:7	54
A 新しい歩みの出発点 12:1-2	54
B 新しい歩みの具体例 (1) 12:3-16	56
C 新しい歩みの具体例 (2) 12:17-13:14	59
D つまずきを乗り越えて 14:1-15:7	62
7 課 パウロの異邦人宣教と計画 15:8-33	66
A 異邦人も神をあがめる 15:8-13	66
B パウロの異邦人に対する務め 15:14-21	68
C パウロの今後の宣教計画 15:22-33	70
8 課 おわりに 16:1-27	72
A 最後のあいさつと勧め 16:1-20	72
B パウロの同労者からのあいさつと結びの祈り 16:21-27	74
あとがき	76
分かち合い、共に祈ろう	77
地図	80
年表	82

手引の使い方

「ローマ人への手紙」は、パウロが、地中海の東部沿岸地域で宣教を進めていた、そのただ中で書かれました。その働きについては「使徒の働き」に記されていますので、先に「使徒の働き」を学ぶと「ローマ人への手紙」が理解しやすくなります。

この手引は、グループでの聖書研究のために作られましたが、個人の学びや日々の祈りのためにも使うことができます。

グループ聖研の場合の指針

1. 司会者

グループの中で司会者を決めましょう。司会者は、手引にそって質問をする人です。参加者の意見を引き出し、参加者同士が話し合えるように励まします。また司会者は、どのような意見でもその是非を判断せず、聖書箇所解説や、意見の相違を解決する必要はありません。司会はできれば交代で行います。

2. 参加者

お互いの意見を尊重して、考えたことを率直に分ち合い、学んでいる聖書箇所から語り合しましょう。また、脱線をしないように気をつけましょう。

3. 学びの時間

グループの状況や必要に応じて調節してください。

4. 「考えよう」

各セクションの最後にある「考えよう」の質問は、状況に応じて選んでお使いください。

5. 解釈の違い

「ローマ人への手紙」は、歴史を通して注目され、研究されてきました。解釈がいくつにも分かれる箇所がありますので、本書との解釈の違いがある場合は、教会の教職者・指導者の立場を尊重してください。

凡例

この手引は「聖書 新改訳 2017」に準拠しています。聖書箇所の略式表示は、新改訳聖書巻末の一覧に従っています。

例) イザヤ書 45 章 18 節 → イザ 45:18



この印がある場所は、巻末の地図で確認しましょう。



この印がある場所は、巻末の年表で確認しましょう。

脚注 下線のあることばは、各ページの下(脚注)で解説されている用語です(例:キリスト^a)。脚注にある聖書箇所は確認のためのもので、グループ聖研では開く必要はありません。

注) 質問のあとに、必要な注を記してあります。

コラム まとまった説明がされている用語です。

コラムのテーマとページ

主	11
ギリシア人	15
救い、救い主	18
神の義	20
信仰の父アブラハム	27
世界の相続人	27
死と永遠のいのち	32
内村鑑三が待ち望んでいた世界	40
神のご計画	42
神のかたち(像)	44
家の教会	75

まえがき

「ローマ人への手紙」を読み始める前に、手紙の背景を学びましょう。


著者パウロ

^{げんかく}厳格なユダヤ教の一派で育ったパウロの神への熱心は、キリスト者を迫害するほどでした。しかし、ダマスコ途上で、復活したイエスと出会って回心します。その後、パウロはローマ帝国の東部、特に、現在のトルコがある小アジアと、ギリシアにある都市に赴き、そこに住むユダヤ人を中心に、イエスこそが旧約聖書で預言されていたメシア（キリスト）であると宣べ伝えるようになりました。また、パウロは異邦人（ユダヤ人以外の人々）への宣教に召されていたので、彼らにも積極的に福音を伝えて行きました。三回にわたる宣教旅行が終わる頃には、パウロは帝国の東部での務めは終わったと考え（15:18-23）、次はローマを拠点として、西部への宣教を計画していたのでした。

「ローマ人への手紙」について

ローマ教会の成立に関しては、ペテロが設立したという説や、ペンテコステの時にエルサレムで回心した人々（使2:10）が中心となってきた教会だったという説などがあります。

(1) ローマより西の宣教を

この教会は、いくつかの理由でパウロにとって重要な教会でした。ローマ教会の人々の信仰は地中海全域の教会に知られていて（1:8）、影響力があったと思われます。また、帝都（帝国の首都）にある教会として、注目されていたことでしょう。そして、ローマ市は、帝国全体に張り巡らされた、効率の良い道路網の中心でしたので、パウロが志す帝国西部の宣教の拠点としてふさわしい場所にもありました。ちょうどアンティオキア教会が、交通の要所にあるローマ帝国第三の都市にあり、帝国東部の宣教の拠点教会となったように、ローマ教会を西部宣教の拠点にしたいと願ったのは当然のことだったのでしょう。そこでパウロは、まずローマにしばらく留まっ

て教会を強め、ローマ教会から派遣されてイスパニア（スペイン）に向けて出発したいと計画を立てていたのです（15:22-24）。

(2) ローマ教会内部の問題：分裂とつまずき

ところがローマ教会は、ユダヤ人と異邦人との「分裂」、そして飲食などに関する「つまずき」という二つの大きな問題を抱えていました。

<分裂>

もともとユダヤ人と異邦人の間には、各地の都市で商売上の利益や宗教的な問題で確執がありました。それに加え、ローマ教会では信仰理解の違いからも問題が起こっていました。

紀元49年頃に皇帝クラウディウスがローマ市からユダヤ人を追放したので（使18:2）、ユダヤ人キリスト者もローマを離れなければならず、教会は一時、異邦人キリスト者だけになりました。そこに、クラウディウス帝の死後（紀元54年以降）、ユダヤ人キリスト者が戻って来たため、律法をめぐる考え方の違いが浮き彫りになったと思われます。

パウロたちの第一回宣教旅行の後に、教会の指導者たちが集まってエルサレムで会議が開かれましたが、それは、「異邦人も、割礼を受けてモーセの律法を守らないと救われない。神の民に加わることもできない」と主張する人がいたためでした。会議の結論は、「異邦人は、モーセの律法を守らなくても信仰によって救われ、神の民に加えられる。異邦人に律法のくびぎを負わせてはならない」というものでした（使15章）。パウロたちは、この決定を第二回宣教旅行で小アジアの諸教会に伝えていきます。しかし、この、律法と信仰の問題の解決は簡単ではありませんでした。ユダヤ人キリスト者は、どうしても律法と割礼を重視して異邦人を導く立場にあると考え、一方、異邦人キリスト者は、自分たちこそが信仰による真のアブラハムの子孫であると誇り、律法とユダヤ人を低く見ていました。そのため、いくつかの教会で二者の間には軋轢あつれきがあり、ローマ教会でもその問題の解決が求められていました。

<つまずき>

ローマ市では、通常、市場で売られていた食肉は、偶像にささげられたものでした。そのため、そのような肉は汚れていて食べてはならないと考えるキリスト者がいて、肉を食べるキリスト者をさばいていました。また、ユダヤ

教には食べてよい肉の種類や、厳密な調理の方法があったため、その規定を守ろうとした一部のユダヤ人キリスト者は、背景の分からない肉はすべて避けていたとも考えられます。一方、すべての食物はきよいと考えて、何でも自由に食べるキリスト者は、肉を食べないキリスト者を見下していました。

< 解決を >

パウロが語る福音によれば、キリストを中心とする共同体は、ユダヤ人とギリシア人、男と女、奴隷と自由人の間の分裂や差別といった問題を克服できるはずでした。それだけではなく、そのような、人間本来の共同体のあり方を示すことによって、世界を照らす光となる使命を帯びていました。ローマ教会が「分裂とつまずき」(16:17)を乗り越えて一致を回復し、生活のすべての面で神に喜ばれる生き方をするようになることは、パウロの願いであり、緊急の課題でした。

そこでパウロは、第三回宣教旅行も終盤の、ギリシアに滞在していた時期に(使 20:1-3)、ローマ教会に向けて手紙を書きました。その中でパウロは、これらの問題を解決するために緻密で徹底した議論を展開していきます。それは新約聖書の中で最も長い手紙となり、キリスト教信仰の真髄を詳細に語る書として、現在に至るまで重視されています。

神のご計画

パウロの教えを手紙から見ていく前に、旧約聖書に精通していたパウロが当然のことと理解し、多くのローマ人キリスト者も共有していた、聖書の語る「神のご計画」(8:28)を概観しましょう。それは、使徒たちが各地で宣べ伝えたメッセージであり(使 20:27)、「ローマ人への手紙」の背景となっているため、この手紙を理解するために不可欠なものです。なお、「聖書を読む会」の手引「救いの基礎」はその「神のご計画」を簡潔に学ぶものですので、ご参照ください。年表

(1) 非常に良く造られた世界

神は天地万物を、愛を込めて美しく造りました。最後に「神のかたち」に造った人を地上に置きました。男と女は、神の愛を受け止めて、神を愛し、互いに愛し合い、「愛と正義の神を表す者として、地を治める」という

「神のかたち」としての使命を果たしていました。その時の世界は、すべてが非常に良かったのです。

(2) 人の背き

ところが、人は、神の戒めに背いたために、本来のあるべき姿ではなくなってしまいました。人の罪がもたらす悲しみと苦しみが、家庭、社会、そして被造世界全体にまで広がっていきました。

(3) 救いの約束

しかし、神は、アブラハムの子孫を通して人と世界を救うと約束されます。その約束は、子孫の中の特別な王メシア(キリスト)によって成就するというのが旧約聖書の中で次第に明らかにされていきます。メシアは人の罪を赦し、聖霊によって人の心を新しくし、正義をもって世界を治め、平和をもたらす、自然界をも回復する方であると預言されていました。つまり、神は罪によって歪んだ人と世界を滅ぼし去るのではなく、それをメシア(キリスト)によって回復し完成するというのです。

(4) メシアであるイエス

そのメシア(キリスト)はイエスである、と宣言するのが新約聖書です。イエスは、神が愛と正義をもって治める「神の国」を地上にもたらしました。そして、全人類の罪のために十字架にかかり、死んで葬られます。しかし、三日目に死人のうちからよみがえることによって、公にメシア(キリスト)であることが示されました。その後、天に昇り神の右の座に着き、世界の王、主として、全世界と歴史を導き始めました。

(5) 教会を通しての世界の回復

メシア(キリスト)であり、世界の主であるイエスは、十字架のみ業に基づき、聖霊の力により、キリスト者とその共同体である教会の宣教と生活を通して「神の国」を広げておられます。罪によって損なわれた人と世界が回復され始めたのです。そして、私たちも今、メシアによる回復の業にあずかっています。

(6) 再臨と世界の完成

イエスは再び地上に來られ、神の国を確立します。その時、罪はさば

かれ、悪は完全に払拭されます。被造世界も回復してさらに豊かになります。キリスト者は新しくされた地上によみがえり、イエスと共に王として世界を永遠に治めることになります。この時、神が天地を造られた目的が果たされ、神のご計画が完成します。

以上が、聖書の語る世界とその救いの全体像です。

旧約聖書に精通^{せいっとう}していたパウロは、この神のご計画を背景に、地上の全ての人^{ひと}がイエスを主であり、メシア（キリスト）であると信じて従うようになることを願いつつ、「ローマ人への手紙」を書きました。そのことを念頭に置いて、この手紙を読んでいきましょう。

1課 はじめに 1:1-17

A あいさつ 1:1-7

「ローマ人への手紙」では、当時の習慣に従って、最初の部分に手紙の送り主であるパウロと、受け手であるローマのキリスト者について述べられています。この部分には、「ローマ人への手紙」を貫く中心的なメッセージが凝縮されています。

- 1 パウロはどのように自己紹介していますか (1:1)。
キリスト^a、使徒^b
- 2 福音(よい知らせ)は誰がどのように約束したのですか (1:2)。
預言者^c、聖書^d
- 3 福音は誰に関するものですか (1:3)。
- 4 イエスは誰の子孫ですか (1:3)。それは何を示していますか。
ダビデの子孫^e
- 5 イエスが復活したことによって何が示されましたか (1:4)。神の子^f

^a キリスト:ヘブル語の「メシア」のギリシア語訳。メシアは「油注がれた者」の意味。祭司や王の任職式で頭に油を注いだことに由来する。後に、イスラエルを贖い、世界を支配する特別な王を指すようになり、ユダヤ人はその到来を切望していた。
^b 使徒:派遣された者の意味。福音を宣べ伝える者として特別に任命されていた。
^c 預言者:旧約聖書の時代、神の言葉を人々に伝えた人。
^d 聖書:新約聖書で「聖書」と言えば、旧約聖書を指した。
^e ダビデの子孫:メシアはダビデ王の子孫から出ると預言されていた。そのため、「ダビデの子」と言えば、メシアを意味した。
^f 神の子:旧約聖書では、ダビデの子孫であるイスラエルの王を指した(IIサム7:11-26)。次第に、来るべきイスラエルの王である「メシア」を指すようになり(詩篇2:7)、一世紀のユダヤ社会では、「神の子」と言ったとき「メシア」(キリスト)を指していた(マタ26:63、ヨハ1:49、11:27、使9:20)。

- 6 パウロは御子を何と呼んでいますか (1:4)。その言葉にはどのような意味が込められていますか。
p.11 コラム「主」、p.8の脚注「キリスト」参照。
- 7 パウロが受けた使徒の務めの目的は何ですか (1:5)。信仰の従順^a
注)パウロはイエスご自身から異邦人宣教に任じられていました(使9:15、22:21)。
- 8 キリスト者はどのような人々ですか (1:6-7)。聖徒^b

三まとめ

神は、旧約聖書で約束した通りに、ダビデの子孫からメシア(キリスト)を遣わされました。そして、イエスを復活させることによって、イエスこそがそのメシアであることを公に示されました。「イエスがメシアである」、これが福音です。パウロは、すべての異邦人に主イエスへの従順をもたらすよう召された使徒でした。

考えよう

- 1 福音とは何でしょうか。
- 2 イエスが世界の王であるならば、私たちにどのような従順が求められているのでしょうか。

祈り

神よ、私たちが、福音のうちに表されたあなたの愛を十分に知り、そして、心から主イエスに従っていけるように助けてください。

^a 信仰の従順:イエス・キリストへの信仰から生まれる、主への従順。
^b 聖徒:神のために取り分けられた人々。